

〔新刊書評〕

Fumie Kumagai, Masako Ishii-Kuntz (eds.)
*Family Violence in Japan :
A Life Course Perspective*
Springer, 2016

大 風 薫

本書は、「Family Violence (家庭内暴力, 以下 FV)」という概念を、人がライフコース全体を通じて体験する家族間の相互作用において生じる様々なタイプの虐待行動とし、FV を、ライフコースの中で再生産される行為という視点で捉えることの重要性を主張するものである。著者らは、日本では、たとえば児童虐待や配偶者への暴力といった問題を個別の問題として分離して扱う傾向があり、それによって、研究テーマやそれを支える調査データの収集、あるいは法律の整備や各種支援策に限界が生じているという問題意識を持っている。

本書は全6章から成り、編者の熊谷文枝・石井クンツ昌子を中心としたFVや家族研究の専門家5名が執筆している。各章は、ライフコース全体におけるFVが俯瞰できるように構成され、それぞれの章で着目するFVの定義、歴史的な経緯と今日的な問題、先行研究、日本の法律や各支援機関における活動の紹介とその限界、FVの防止に向けた今後の課題がまとめられている。また本書のユニークな点は、FVが発生する要因や表面化しにくい要因について、日本独自の社会文化的要因による詳細な考察を加えていることである。さらに、本書は英語で執筆されているため、日本のFVや日本の家族・社会に関心のある海外の研究者に対してグローバルに情報を発信できると同時に、日本のFV研究者に対しても、FVのライフコースにおける再生産という視点や、各テーマに関連する研究・政策動向などを包括的に提供するものとなっている。

では、各章について紹介しよう。

第1章は、本書を読み進めるための指針となるイントロダクションである(著者:熊谷文枝)。まず、本書におけるFVの定義と暴力や虐待の種類を示し、FVは家族やそれに準ずる親密な関係間で他者を支配したり害したりするために取られる虐待行為であること、その虐待行為は肉体的、精神的、性的、放棄・放任などさまざまなタイプに及ぶことが整理される。次に、FVを個人の病理ではなく社会問題と捉えることの重要性を指摘し、米国のFV研究の成果を紹介した上で、日本のFV研究においても、人びとのライフコース全体を見据え、FVの被害者や加害者が再生産されるという視点を取り入れる必要があると述べる。さらに、代表性のあるサンプルによるFV調査の実施が重要との見解を示し、FVを測定する尺度として、FV研究の第一人者である社会学者Strausらが開発したCTS(the conflict tactics scales)を、このスケールを使用した国際比較研究とともに紹介する。また本章では、日本のFVを考察するための特徴的な背景として、「タテ型社会」「家父長制的な家族構造」「集団志向」「甘え(=依存)」などといった日本社会の特性を説明するとともに、FV研究に地域別の視点を取り入れる必要性も指摘する。

第2章は、ライフコースの初期段階として、子ども(成人子を除く)に対する虐待を扱う章である(著者:石井クンツ昌子)。本章では、まず、子ども虐待の定義を整理し、しつけと虐待の境界を区別する困難さも指摘する。次に、

子ども時代の虐待経験が成人後の人間関係や、虐待の加害者・被害者を生み出すというFVの連鎖を説明する概念モデルを提示し、FVにおけるライフコース視点の重要性を強調する。続いて、奈良時代の子殺しや子捨てから現代にいたるまでの子どもの虐待や抑圧を歴史的に俯瞰し、今日の子どもの虐待問題に対するより深い理解を読者に促す。さらに、本領域で適用される理論として、資源理論、交換理論、社会的学習理論を紹介し、虐待が起こる要因や虐待がもたらす影響について、日本社会の特性を絡めて説明しながら、日米の研究成果を豊富に示す。最後に、子どもの虐待を防止するための制度面の状況を説明し、そこに一定の成果を認めながらも、残されている問題を具体的に指摘し、一般市民の参加まで含めた支援システムの一層の拡充を求める。

第3章は、配偶者やパートナーなどの親密な関係における暴力に関する章である(著者:佐々木卓代・石井クンツ昌子)。日本でこの種の暴力はドメスティック・バイオレンス(以下DV)と呼ばれるが、欧米ではIPV(Intimate Partner Violence)と称されことを説明し、まずIPVの定義を整理する。続いて、IPVはそれ自体の問題にとどまらず、配偶者やパートナー間の暴力に晒される子どもたちの発達に影響を及ぼすことにも言及し、改めて暴力が世代間に連鎖する可能性とライフコース視点で研究を行う必要性を述べる。次に、IPVの歴史的な変遷を紹介し、日本社会では、「イエ」制度を背景とした家父長制度の名残や「ウチとソト」「甘え」といった特性によって、家庭内部の暴力が表面化しにくい、あるいは暴力と認識されにくいという問題点も指摘する。さらに、日本の法律や社会政策として、DV防止法(正式名称:配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律, 2001年)やその2004年の改正法の画期的な意義を述べつつ、未だ残される課題を具体的に列挙した上で、今後のIPV防止に向けた展望を複数の角度から言及する。

第4章は、主に青年期の子による親への暴力

をとりあげる(著者:岡村利恵)。まず、本FVの定義を示したのち、日本でこの類の暴力はこれまであまり議論されることがなかったが、親子の同居期間が長期化して親子の相互作用の機会が増加することは、子から親に対する暴力のリスクを高める可能性があることを指摘する。そして、このような暴力は、子はいくつになっても子であるという親の意識や「イエ」制度の名残による子どもをかばう親の意識、集団志向によって表面化しにくいという実情を踏まえながら、子から親への暴力が行われる要因を、主に子どもの社会的な孤立の問題から論じる。その際、子から親への暴力は、幼少期におけるしつけや暴力シーンの学習などの影響があることも示唆し、改めてFVにおけるライフコース視点の重要性を確認する。法律や政策の現状としては、子から親への虐待に関する法的な整備が進んでいないという問題点をあげ、法律の制定や、被害者を保護する体制、加害者へのフォローといった仕組みを求め、子どもの社会化と親への暴力に対する研究の蓄積が必要との見解を示す。

第5章は、高齢者の虐待に関する章である(著者:林葉子)。本章は、まず、日本における高齢者虐待の定義と歴史的な経緯を俯瞰し、高齢者に対する考え方や虐待が、その時々为社会経済的な環境などによって影響を受けて変遷する様相を示す。次に、今日の日本の高齢者虐待の現状を各種統計データによって確認した上で、高齢者の虐待の要因を、虐待の被害者・加害者、被害者・加害者間の関係性、社会文化的要因などを含む多層的な観点で整理する。日本の文化的背景としては、「嫁」や女性がケアを担うものという役割規範の影響が説明される。続いて日本の法制度の現状として、介護保険制度、成年後見制度、および高齢者虐待防止法(正式名称「高齢者虐待の防止、高齢者の擁護者に対する支援等に関する法律, 2006年」)の要諦を示したのち、近年の日本の研究のトピックとして、高齢者虐待防止法には現状含まれていないセルフネグレクト(自己放任)の問題や単身高齢者

問題などの議論を紹介する。最後に、高齢者虐待の防止に向けた対策について、高齢者自身の自立の観点や、ライフコースの観点からの議論が示される。

最終の第6章は本書を総括する章である（筆者：熊谷文枝）。まず、改めて各章の概説を述べたのち、日本のFV研究における今後の課題として、再度、FVが日本社会にどの程度、どのように生じているのかを把握するためのランダムサンプリングによる調査の実施を求める。また、相互に関連し合い、世代間で再生産されるFVの複雑性を解明するために学際的な研究を行う必要があること、日本国内の地域性の違いへ着目するべきことも指摘する。続いて、日本のFVを読み解く上で、日本社会の社会文化的特性が有効であることを示し、最後に、FVを個人発達過程とともに捉えることの重要性を強調する。

本書は、日本のFV研究や制度の現状、研究や制度上の課題を包括的に示す最新のガイドとして、FVの研究者はもちろんのこと、学生や実践家なども含めた幅広い方々に読んでもらいたい書である。特に、本書で繰り返し強調される、FVはそれが行われる一時点における社会問題にとどまらず、ライフコースを通じて継承・拡散される根深い社会問題であることを強く意識させてくれる点において、類書にはない特長を有する。また、時代的な背景やその時々で発生する事件によってFVの捉え方が変化することを指摘し、虐待や暴力についての定義を改めて丁寧に示している点においても、FVに対する正確な理解を促すことに貢献している。さらに、FVを日本人の社会文化的背景から考察するという試みもユニークであり、FVに関心をもつ読者に対して、大きな刺激とインスピレーションを与えるものである。また、統一的主题のもとに全編が明快に構成されているため、英語で書かれている書ではあるが読みやすい。研究者や学生にとって、書籍や論文を執筆する際の参考になると思われる。

今後も、筆者たちへは、引き続きFVに関す

る研究や政策の動向を発信していただきたいと考える。その上で、特にリクエストしたいことは、量的な調査に関するより踏み込んだ助言や提言である。本書の中でも繰り返し述べられていたように、代表性のあるサンプルによって日本のFVの現状を把握することは喫緊の課題と考える。しかし、日本的な社会文化的特性によって、FVはプライベートな問題として秘匿されることが多く、表面化しにくい。FVに関する調査のあり方や、本書で説明されたCTSの尺度に加えて、たとえば回答拒否の問題への対処法などの具体的な調査法などについて、諸課題や留意点に対する知見を提供していただくことで、日本のFV研究が一層進展すると考える。また、FVの研究を学際的に行うにあたっての有効なアプローチ方法や、FVを防止する政策面の対策、市民としてできる対処策などについても、さらなる見解や提言をうかがってみたい。

本書を読み、FVは世代間で連鎖する極めて重要な社会問題であることを認識させていただいた。本書をきっかけに、FVを家族研究分野における重要テーマとして注視していきたいと考える。